

これまでの私は、正直に言うと被災地の土壌汚染に対して具体的に何かを考えて、行動しようと思ったことは一度もなかったように思う。四年前の東日本大震災の時、私が住んでいた茨城県では震度6強の揺れを観測し、実際に停電や断水が続く中で生活をもつて経験をしたのにもかかわらず、日常生活が戻ってくると原発事故とそれに伴う土壌汚染等の問題に関してはどこか他人事のように感じ、被害の酷かった地域に出向き何か行動をおこすなどということもなく次第に関心が薄れていってしまっていた。

ところが農学部に進学し、この講義も含め被災地の放射線被曝や土壌汚染について学ぶ機会が多くなっていき、実際東大の農学部が被災地の行政や地域団体と連携して取り組んでいる問題も数多くあることを知って驚いた。また、授業の中で例えば土壌に降り注いだセシウムに対する対策として表面の土と下の土を交換することで放射能の影響がかなり抑えられることや、カリウムを撒くことで作物がセシウムを吸収するのを防ぐことができるといった技術面の知識を得たり、役人と研究者との問題認識に差があるといった行政面での問題があることも知ることができ、自然と被災地での農業面での再生について考えることが増えていった。特に、除染が終わった農地で新しい農業形態を導入することで再生を図っていくという取り組みがあることを聞いて、被災地の農業再生の新しい考え方にも興味をもった。具体的には、精米すればほぼ放射能の影響がないことを利用した日本酒を特産品としてアピールすることで復興をめざすという取り組みが面白いと感じた。

しかしそうして実際行われていることを知るにつれ、では今の自分に何ができるのかを考えても特に画期的な考えが浮かんでくるわけでもなく、被災地の現場を自分の目で見たこともない自分にとってそこでの農業再生を具体的に考えるのは困難だと痛切に感じた。現場に赴く必要性を感じると同時に、今の自分にできることといえば、一生懸命農学を学び農業に対して深い考えを持つことであると思った。

放射能汚染はこれまでの日本では前例のないことであり、農業分野においても今後何十年にも渡って取り組んでいくことが必要な問題であることは明らかである。農業再生の観点から考えてみると、例えば除染が終わったものの生活環境など他の要因によって元の住民が農業をしに戻ってこれないような地域などでは、その土地を国や企業が買い取ってそこに高度な機械を導入して大規模な農業を展開したり、さらには今まで用地の確保が難しかったために実現不可能だった大規模な研究に利用したりといった、今までにはない大型農業研究地域としての発展を進めることもできるだろう。このように、もし私が将来この分野に関わることができるならば、被災したこの地域でしかできないような農業再生を是非とも試みてみたいと感じている。